

牛群ドックで気になった飼養管理の指摘事例

佐久家保では関係機関と連携し管内の酪農場において牛群ドック(血液・生化学検査など)による飼養管理指導を実施しました。その中で、特に気になったポイントについてご紹介します。

いかにエサを多く食べさせるかが酪農技術の要諦

○ 飼槽にエサのない時間をできる限り作らない!!

搾乳牛は乳量が多いほど採食量、飲水量が多く、1日当たり40~60kgの飼料を食べ、60~120ℓの水を飲みます。そのため、1日の大半を「食」のために費やさなければなりません。

下のグラフで示した牛群は、朝夕2回給餌ですが、昼間の時間帯(10時~15時)に飼槽は殆ど空っぽでした。

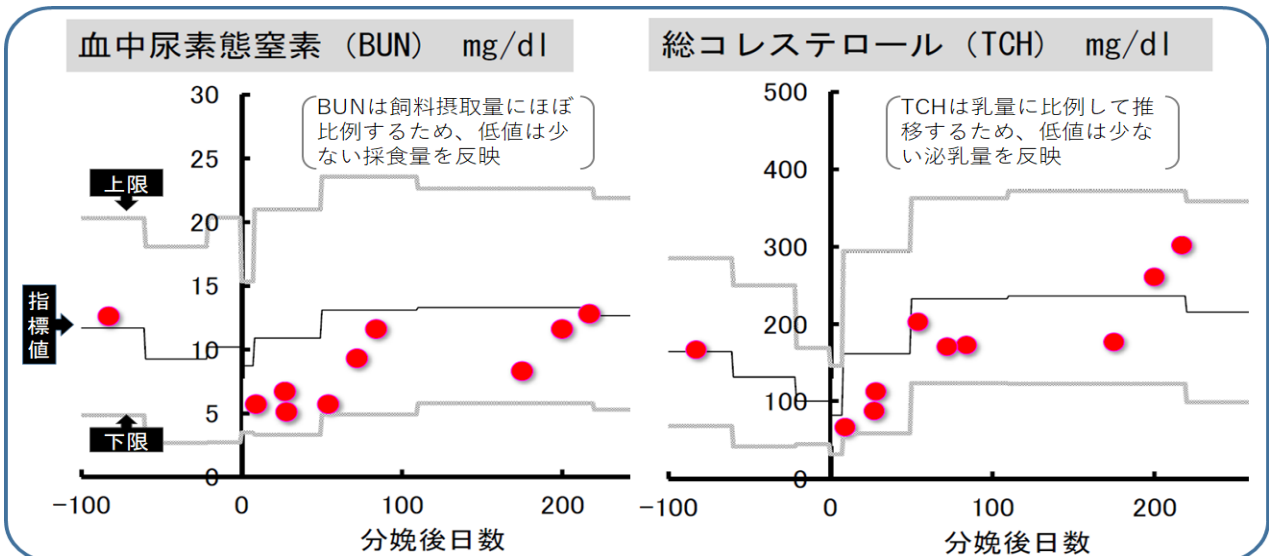
牛群ドックでは、泌乳期の血中尿素態窒素(BUN)と総コレステロール(TCH)が低め推移しており、食い込みの悪さを反映した所見です。

乳牛の飼養技術は、「採食量をどのように高くするか」又は「採食量を高く維持するか」にあります。

その基本は、粗飼料は飽食にして「いつでも食べられる状態にすること」です。

具体的には、「一日20時間以上採食可能な状態を保つ」ことが乳牛の生産性と健康維持に寄与する栄養管理の必要条件です(栄養バランスはその次です)。

一日2~3kgの乾物摂取量がアップすれば、年間約千キロ/頭の乳量アップにつながります!



○ たかが水、されど水、乳牛を上手に飼うための大前提の一つが「水」

汚れた水は、それ自体が飲水量を制限してしまいます。

新鮮な水を給与しても、ウォーターカップであれ、水槽であれ、汚れては元のもくあみ、飲水量は低下して、採食量にも影響してきます。

ウォーターカップや水槽の汚れに注意し、牛の飲水欲をそそるように、常に清潔な状態で、新鮮な水を十分に飲める環境をつくりましょう。



水コケや飼料残渣で汚れたウォーターカップ

分娩前における牛の移動のタイミングは生産性に大きく影響します！

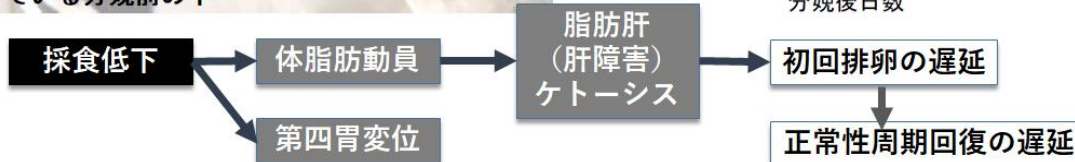
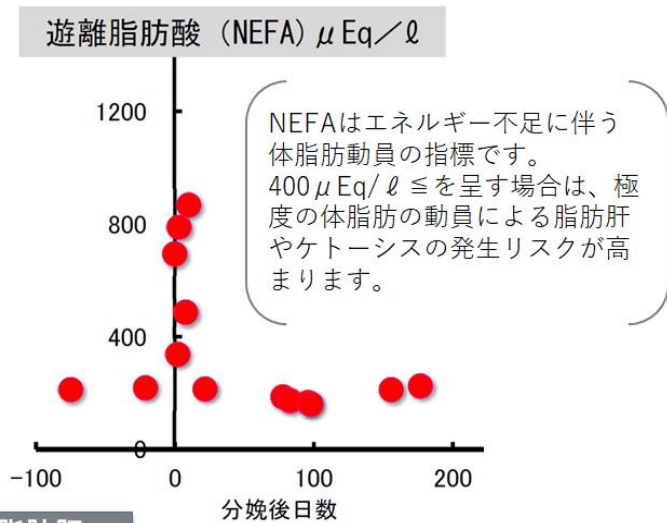
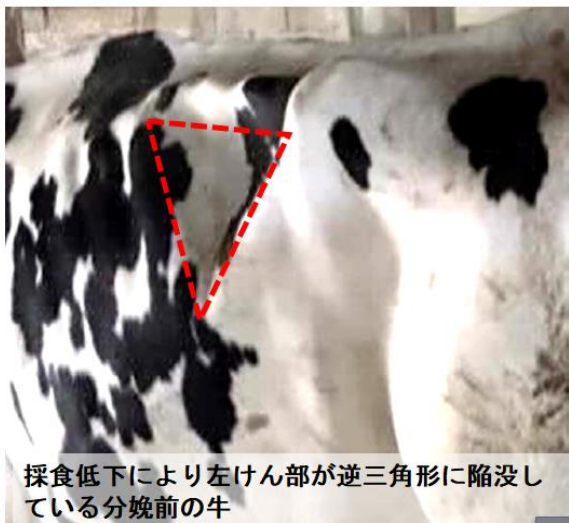
新たな牛房等に移動すると、「**その環境に慣れる**」までに**1週間程度かかる**といわれています。

特に、妊娠末期は通常でも採食量が低下しますが、このタイミングでの牛の移動や群編成は、輪をかけて採食量が低下してしまい、分娩後の立ち上がりでエネルギーバランスが大きく崩れ、疾病リスクを高めます。

下図は分娩直前に乾乳牛群(放し飼い)から係留牛舎に移動する形態の牛群における遊離脂肪酸(NEFA)の推移です。NEFAの上昇は、採食量の低下による極度の体脂肪動員を示し、代謝障害の発生、引いては繁殖性の低下にも関係してきます。

乾乳牛の移動や群編成のタイミングで重要なことは、**分娩予定3~10日前は避けて**、分娩予定日の3週間前までに行うか、分娩してから移動するように工夫しましょう。

分娩房で分娩させる場合でも、滞在時間は極力短くし、最大で2日程度に制限することが推奨されています。「分娩房はトイレのように使うべき、用を足す寸前に入れて、済んだら出す！」(某有名な先生の言葉です。)



蹄冠、飛節が腫れる牛の要因を考えよう！

今回多くの農場で蹄冠や飛節の状態をチェックしました。趾蹄障害を起こす要因としては、**ルーメン・アシドーシス**や**エサの蛋白質とエネルギーのアンバランス(溶解性蛋白の過剰)**などの栄養的な要因、**過長蹄**などの不適切な管理のほかに、居住性としては**牛床の長さ・広さ**、**牛床マットの硬軟や素材**、**敷料の種類や有無**、さらには**牛床の衛生状態**が関係します。

今回、特に気になったのが**“硬い、敷料の少ない牛床”**です。障害の程度やその状況は、農場によって様々ですが、**牛の健康と生産性に「牛床」も決定的な影響を与えています**。牛の生産寿命を保つため、あらためて自身の牛を観察し、趾蹄障害の要因を検証し**“カイゼン”**を図りましょう。



コロナ禍、飼料・資材の高騰、生乳需給の不安定化など厳しい環境下ですが、牛の健康を第一に考え、基本に忠実に飼養管理に取り組みましょう！